

紡ぐ、うた

春野 たまこ

約束はいつも

風と雑踏に溶ける

溶ける最後の破片まで

見届けてから歩き出す

私にしか紡げない

うたがある

少し痛くて

かなりはがゆい

この肉片をどうか

あなたのものにして

あなたが変わった

そう思った

私があこの時のまま

今にいないだけ

いつか見せる傷も
癒され消えるだろう

無限の色の中で
浮かんだり落ちたり

幻かもしれない瞳を
見つめ合うのか
そらすのか

温度が
それを決めるだろう

うたは羽根

私をあなたの元に

言葉の余韻

あとに残る味

百回百通りの囁きも

苦く舌に残るのは何故

それでも君の日常は
冷たい鉄を
強くはじくような
共鳴と反発の光の中
進みゆくわけです

私がどろどろに
原型をとどめず
溶けていくことと
何の関係もないのです

夏草は季節を混ぜる

すべての空気が

行き来する

吸い込み、その吐息は

春へ戻ることも

冬へ抜けたりもする

あの時のわたしを

垣間見ることできる

心とリンクする言葉は
布で水をすくう程です
伝えたい何かは
あなたに届きたくて
泣き出すばかりです

このうたはあなたに
届いたでしょうか

溶けた私は今や

形を取り戻しつつある

私に付属するなにかも溶けたから

私そのものに生まれ変わり

体にマーブルの模様を

美しく痛く

震えるような渇き

潤しを求める

無声の叫びは

砂がすべて

吸い込んでしまう

何が私を潤すの

水に見える遠くも

幻だと知っている

あなたは光

追いかけて泳いでも

辿りつけない光

幾度掬っても

手から零れ落ちる光

掴むことはないのです

心の奥を照らしたくて

今もまだ強く憧れる

近すぎず

無視できず

手に取りたくなる

そんな距離

悲しみは消えましょう

想いでも消えましょう

あとに残るは君の味

喉をひきつける熱さ

いっそ持ち続けよう

小さく終わらない

君は無視できない

特別な何かは

きっと耳の下辺りに

あるいは睫毛にそっと

近すぎて見えなくて

だから

愛でる君に特別な想い

会話の数が

始めから約束されていて

満たされただけのこと

大切な一言は

あなたのどこに響きましたか

強く求め

求めるが為に

強くなる

何が私を癒すだろう
ついに果たせなかった
想いをなぞり
痺れゆく傷の深さに
震える体を君に預けて
あえて力を抜き
この痛みが消えるまで
君に包まれよう

この砂丘越えたら
君に会えるかも

だって私がここに
生きてること
君だけが知ってる
君だけに教えた

沁みてなくなればいい
痕跡も証拠もいらない
想いでにならなくても
あなたが癒され
このうたが
あなたの一部になれば